

## 環境の場としての都市論

2004年度から2005年度にわたって、当初は黒石、橋本、松村によって、後半は渡部の参加を得て「環境の場としての都市論」をそれぞれの都市・建築学、文学、哲学、化学の領域からできるだけ多角的に考察することを試みた。また、講演者として今道友信氏、野島久雄氏、富永健一郎氏、アルヴィ中村氏、深見奈緒子氏、森田昌俊氏など、哲学・化学・科学・文学・情報社会学・建築学の諸分野で優れた業績を上げておられる方々をお招きし、環境や都市に関する先端的研究の状況をご教授いただいた。

本研究において初年度は21世紀の都市に於ける創造性を明確にすること、また次年度には文学に表現された都市イメージ、都市の倫理、都市の環境問題で問われる科学技術の発達と生物としての人間の問題、都市の空間造形と人間生活の相互関係について考察することを目的として各自が調査と研究を行った。合同で議論する機会を得たときに常に意識されたことは、都市や環境という概念は領域ごとに非常に異なった解釈をしており、それを組み合わせると総合的に語る事も、そのものを論理的に精密に語ることも非常に困難であるということだった。その一方で、個々の事例に基づいて都市を人間の生活環境として捉えるならば、歴史的なあるいは芸術的な都市空間のイメージ、現代の科学技術の開発における人間の生活との調和のための社会・政治・産業的な均衡の機構、そして地域的な都市構造の多様性と変遷に見られる文化の発達など、都市と環境を考える全ての領域で、自然や生活世界に適応しそれを豊かに創造しあるいは問題へと追い込んでいく、人間自身のすばらしさと矛盾がその核心であることを鮮明に感じることができたのだった。特に近代化の過程

での19世紀末から20世紀初頭にかけての都市の変容と芸術活動、第二次世界大戦後のグローバル化と生活様式や科学技術の変容、20世紀末からの情報化社会の進展の一方で進む世界規模の、そして目に見えない環境条件の変化等、人間と環境や社会との関係の仕方が急激に異なる次元へと進んでいくことの認識は、今後さらにこの領域では学際的な研究が必要であることを感じさせた。

### 「現代都市の空間論」

都市の空間論を造形的な視点からではなく、そこで生きる人々の行動やその環境との相互関係の変容という視点から考えてきた。2004年度は都市の景観や生活様式に関する現象学的なフィールドワークの理論と実践について、大正・昭和期の東京の変貌に関する調査や考察を行った今和次郎による考現学や風俗研究の意味の分析、その影響を受けて昭和後期に発達したまちづくり運動と商業圏形成手法にみる都市のイメージ創出の機構と領域観等について研究を行い国内や海外の学会で論文発表を行った。また夏期休暇中には、国内外の都市建築史研究者たちと中国上海に於ける急速な都市開発のなかで、どのように近代歴史資産が保存されるべきか、また開発と地域の人々の住環境の歴史性の関係はどのようなものかを調査し、具体的な提案を行うワークショップのチームリーダーを務めた。

2005年度は都市概念が日本の近代において形成されたプロセスそのものに関心を持ち、日本近代における郷土イメージの創生と都市生活圏の確立の関係について、主に東北地方の各県における事例を調査研究した。また、近現代にお

いて西洋化し高度に技術化した住生活様式と伝統的な建築技術の共存がどこまで可能か、サステナブルな建築技術の歴史性とはどのようなものかという点について考察し、両課題を国内外の学会で論文発表し、モデレーターとして都市環境技術のマネジメントについてのセッションを主宰した。実際の都市環境の調査研究としては、海外の事例ではインドにおける近代都市計画とその自然・歴史環境・文化の関係の実態調査を行い、現代的都市における歴史的環境の意味を多角的・具体的に考察し、20世紀以降急激に進化した都市開発の理念の限界と問題を検討した。今後は、都市論における社会学や経済学的な視点の可能性、都市意識と地域共同体意識の変容とその中での女性の位置、モダニズムにおける消費活動と芸術的創造活動が都市の空間に与えた影響、歴史的な都市建築の造形や空間の断片化や隠蔽がどのようにわれわれの都市イメージに影響を与えたか、伝統的な建築技術や空間と現代の生活様式の関係などを研究したい。

(黒石 いずみ)

## 「環境と存在」

本研究プロジェクトに1年間参加する機会を与えられ、「環境と存在」という分担課題で調査研究することにした。主な研究課題として、1) 報道やインターネットなどの情報、自らの体験から現存する環境問題を都市との係わりという視点から再構築すること、2) 環境を主テーマとした万国博覧会(愛知)における参加各国の展示から環境に対する取り組みと意識を調査・比較すること、3) 万国博覧会会場におけるゴミ対策の施策と成果の検討(人口過密化に伴うゴミ対策の事例として)、4) 現存する環境問題に化学者はどう取り組んでいるか、および5) 環境と都市の諸問題と対策(各論)をとりあげる。このような具体的な課題を調べることにより、「環境と存在」という視点から都市と環境の問題を捉えてゆくことにする。

この1年間で最も多く報道され、また関心を

もたれた環境問題は、地球温暖化である。CO<sub>2</sub>の排出基準をめぐって国際的な取り決め(京都議定書)が2005年2月に発効し、具体的な取り組みが議論された。このような各論としての取組は時間的に短いスパンの過去と未来をみた意識であり、問題解決のためには不可欠かつ重要な視点ではあるが、地球規模の温暖化については長時間周期における地球の成立ちや太陽系の中の地球というグローバルな視点からの議論も忘れてはならない。逆に、一見、ローカルな環境問題が、実は、地球規模の環境問題の火種になりかねない場合もあるのではないか。そのような事象の予見は重要である。この視点から世界各国の実情について知りうる限りの情報を集めている。得られたデータに関してその分析を行なう。愛知万博においては各国のパビリオンで環境に関する意識に温度差があり、万博の捉え方も環境に対する意識も多様であった。

廃棄物という言葉からは、日常生活の場からでる廃棄物、つまり、日常語で「ゴミ」として出すもののイメージが強い。ゴミ処理の問題は大都市であればあるほど、生活者の協力があって初めて成果が上がる。人の正義感と深くかかわっている。2005年愛知万博では、瞬時的に局所人口が膨れ上がり、しかもそこに集った個人の間には生活者としての隣人意識がないばかりでなく、時々刻々、住民の入替わりがあるという、特殊な人工過密都市が形成された事例とみることができよう。そのような都市においてゴミ処理をどうするかは大変大きな課題であると考え、万博会場の視察を試みた。予め起こりうる事象を予測したきわめて綿密なゴミ処理対策と参加者への指導の徹底が行われていた。非常に成功した事例であると思う。ここで得た対策等は、一般社会に還元されているであろうか。どうもそうとは思われない。現実の各都市の多様さ・複雑さを見通し、最適化された対策を打ち立てられるかどうかゴミ処理、より大きな規模で言えば、廃棄物処理の成否にかかっていると感じた。

環太平洋化学会議（2006.12.17-22開催）において、環境に関する討論が多角的に行われた。この会議は、日本、アメリカ、カナダ、オーストラリアが順に主催国を勤め、太平洋を囲む各国の化学者が一同に集い議論を交わす、4年に一度開かれる国際会議である。環境問題は、天然および人工化学物質との係わりぬきには考えられない。今回の会議においても環境に関するセッションで943件の発表があり、その他化学工業や経済にかかわるセッションなどでも環境対策が広く取り上げられた。発表内容から、環境問題に化学者がどう取り組もうとしているか、グリーンケミストリーへの取り組みの進捗状況、化学会社としての取組と経済性、環境配慮の現状、などについて多角的な現状分析を試みると同時に、化学者として持つべき将来を見据えた環境認識とその取組みについて取り纏める。個人レベルの研究者としての立場に加えて、環境に影響する化学ビジネス（企業）とそれがもたらす経済性に関する考察も、将来を見据えた前向きな姿勢として重要である。いくつかの事例と取組みを紹介する。

身近な生活様式が環境問題と密接に係わっていることは誰でも知っている。知ってはいながら、常々環境に思いを致して行動している人は多くはない。人工過密な大都会であるが故に生じた、または生じるであろう環境問題、車社会に生じた都市的な集合体の分散、市街地の過疎化と過密化、伝統的・歴史的建造物の取り壊し、廃棄物・生活ゴミ処理量の増加と環境・経済への負荷など種々の事例に基づいて、都市と環境問題の関連や持続可能な社会への取り組みについて、現状を取り纏め、将来展望に結び付けたい。

（渡部 徳子）

### 「新しい都市哲学、ウルバニカ」

「環境を場としての都市論」のプロジェクトのメンバーとして2004年から2005年に資料に基いて考察したこと、及び出張の報告によって現在の研究状況を以下にまとめる。この研究プロ

ジェクトに参加した目的は、1) 我々の環境の変化が急激でありその現象は都市に象徴的に現れていること、2) 都市問題は未来の我々の生き方に大に関係していること、3) 従来の都市計画は建築の集合の視点が中心であったがこれからは場の創造としての都市論を考えねばならないこと、4) urbanism としての都市論ではなく、urbanica としての都市哲学を構築していくことが要請されていること、5) 都市は現在のような情報化時代が到来するまで 宗教、文明、文化が発信される場所であり、情報発信の中枢であったこと、6) 更にメンバーの中で議論された sustainability（持続可能性）を都市哲学の何に求めるか、等を明らかにすることにあった。環境（environment）という概念は、“我々を取り巻く世界”つまり従来は自然だけであったが、20世紀の後半には機械と機械とが道具的性格を残して大規模な形で繋がり技術連関としての環境を作り出している。芦原義信は東京を増殖しているが故に生き生きとした活気に満ちた無秩序なアメーバのような大都会と規定し無秩序性に伏在する創造的エネルギーとしての自由性を指摘したが、他方、自然環境の面から考えると、水、風（空気）等の循環、騒音（音）公害、流通（交通、物流）等、公共空間の在り方等を考察すると我々は様々な問題に直面せざるを得ない。また文化環境も無視出来ない。

文化環境の創成の場は都市である。20世紀に都市は世界的な規模で＜ある普遍性＞を目指した。その普遍性は都市に於ける抽象性の追求、つまり新しい都市とは skyscraper を創ること、具体的な都市としては New York を理想にし、perspective な視点から都市を考察した。その結果、この考えはそこに住む人間の生活や土地の風土的特徴を捨象してしまう結果になった。今や自然環境というその場の本来的個性を生かした都市を考察しなければならない。例えば東京の場合、公害は技術的に制御され、隅田川周辺の水環境は改善されたが、ヒートア

イランド現象が頻発する都市になってしまった。我々はそのような大都市の未来を考えねばならない。

都市 (urbs) は古代ギリシアの Polis とは異なる。中世の都市は障壁に囲まれた都市 (urbs) と城壁外の Pagan とに分けられた。Pagan は authodox でないもの、異教、邪教を意味した。ローマの都市は城壁の内に軍隊や貴族が住み、その外 Pagan には paganus (pagan の adjective) “いなかの” (形) つまり一般市民 civil が住んだ。中世都市はこれらの二つの地域の交流が大事であったが、現代都市に於いても大都市とその周囲の部分との対流的な条件、経済的、文化的相補性による立体的構造関係は重要である。

1995年1月の阪神淡路大震災は都市型の災害であった。私は2005年3月、阪神淡路大震災後10年を区切りとして、大都市災害後の都市創りの様々な形、人々が立ち直りの過程で経験し追求したこと、都市の再建について発見したこと、結果としての生活の場等について兵庫県の職員、市の福祉事務所の職員、福祉の専門家、特徴的な町の創造及び再建に関わった住人達にインタビューをして明らかにした。その成果の一部は論文「2030年のライフスタイルへの提言」(日本エネルギー学会) として発表した。

2005年度には「公共哲学」について資料を収集し読み、公共性 (publicity) の概念について Hannah Ahrendt の著書を中心に考察した。2005年8月には愛知万国博覧会を訪ね、「自然の叡智」という題のもとに、現代最先端技術と自然との調和をどのように参加国が考え、提案しているかを調査した。実績を示しつつ提案したのは、石油産出国のアラブ諸国であったように思う。都市論に対しては、内部の見学は出来なかったが「NED 省エネルギー型廃水処理実証施設」、市民参加型のゴミ分別システム、外気式の粉霧式冷房装置、植物の力を借りた壁型緑化施設等注目すべきものがあった。これらのものを過去の都市の遺産を生かしつつ都市の

中でどのように具体的に組み合わせてシステム化するかは大きな問題である。

都市生活を営む生活者が如何に都市創造に参画するか、様々な視点からの考察が必要である。2006年度の「年報」の研究成果発表までに「都市哲学」の第一部を構築したい。

(橋本 典子)

## 「19世紀のイギリスの都市と文化」

「ロンドンに飽きたら人生に飽きたことになる。ロンドンには人生が与えてくれるものの全てがあるのだから」とはサミュエル・ジョンソンの有名な言葉である。十八世紀の文人らしいロンドン礼賛は、混沌というその特質を言い当てている。ロンドンや北部イングランド工業都市は、産業革命の結果、非定型都市として膨張を続けた。その間、極限まで進行した貧困問題は、公衆衛生問題として社会化され、やがて十九世紀末が近づくにつれ、エベニーザー・ハワードの庭園都市論に代表されるような都市計画論の隆盛へと向かっていった。こうした変化のあった十九世紀の百年間に、いったいどのような都市観の変容があったのか。このような大きなテーマを扱うには、実際の都市政策や都市表象の変遷をたどることが必要だが、特に文学研究の観点からは、ロンドンを主題とする文学作品や都市論における都市表象のレトリック(比喩形象)が最も重要なテーマとなるだろう。

ロンドンという都市の姿は、イギリスのさまざまな文学作品の中に深く刻み付けられている。それは単に、物語の舞台が首都に設定されているとか、登場人物たちを取り巻く環境にその時代その時代の都市風俗が垣間見られるとか、物語を飾る二次的な意匠として働いているばかりではなく、何か都市的想像力とでも呼ぶべきものが機能して、物語そのものを産出する母体となっているのではないだろうか。都市計画という鳥瞰図的な視点から社会改革を目指す者が現れる一方で、文学者はあくまでも虫瞰図的な視点に即して、都市に生きる個々の人間の

目に映ったロンドンを描いた。ただし、罪惡に満ちた飲樂の場という道德論の伝統も根強かった。つまり、現実としての都市環境/伝統的宗教的価値観/作家個人の都市体験が三つ巴の力

の場となって、都市文学テキストという磁場を形成しているのである。美術批評から社会論まで扱うジョン・ラスキンは格好の素材となろう。  
(松村 伸一)